



Title	古筆切の中の「仁和寺華嚴院弘融」のこと：伊賀常樂寺蔵兼好・頓阿・弘融三幅対をめぐって
Author(s)	米田、真理子
Citation	詞林. 2002, 31, p. 47-58
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67482">https://doi.org/10.18910/67482</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 古筆切の中の「仁和寺華嚴院弘融」のこと

—伊賀常楽寺蔵兼好・頓阿・弘融三幅対をめぐつて—

米田 真理子

## 一、常楽寺の三幅対

三重県名賀郡青山町種生にある常楽寺には、兼好、頓阿、弘融の筆になるという三幅の掛け軸が伝えられている。この三幅は、「種生伝」(別名「兼好法師行状」)の作者、篠田厚敬によつて奉納されたものであり、奉納時に記されたと思しき函に、まとめて収められている。その函の表には、「伊州伊賀郡種生庄国見山草高寺兼好塚什物也／左 弘融僧都筆／中 頓阿法師筆／右 兼好上人筆／三幅対」と、また、函の底には、厚敬の一首「残しあく此水茎のあと、めて見ぬ世の人があふこゝちせよ」が、書き付けてある(大正十一年七月の常楽寺の「目録」には、「一、兼好法師外二人筆蹟三幅対／右三幅京都篠田厚敬ノ寄贈 壱函」とある)。

これら断簡の存在は、夙に、富倉徳二郎氏によつて紹介されている(『兼好法師研究』。本書は、著者名を「富倉二郎」として、昭和十二年四月に東洋閣より刊行され、昭和十八年二月には、丁字

屋書店から、「日本学芸叢書」として改訂増補版が、さらに、昭和二十二年九月には、「日本学芸叢書4」に改版が出版された。本稿では、昭和十二年版から引用する)。富倉氏は、「参宮電鉄の一駅伊賀名張郡の阿保に下りて、前深瀬川に沿うて南に一里半程次第登りの道を上流へと遡ると種生村といふ在所がある」と、現地へ赴き実見したとして、以下の六点を挙げる。

### 一、頓阿筆の断簡(新古今集の秋の部の写し)

### 二、弘融筆の断簡(後撰和歌集夏の部の写し)

### 三、兼好筆の短冊一葉(兼好家集所載の「みさびえ」の歌)

### 四、兼好筆の伊勢物語の一葉

### 五、兼好上人像(土佐刑部太輔從五位下藤原光成画)(譜は兼好家集の歌「いかにしてなぐさむものを」の歌)

### 六、兼好上人伝記一巻(種生伝本文の写し)

それでは、各切の内容を紹介する。

伝弘融筆古筆切は、「後撰和歌集」巻第四・夏の一九二番書から一九六番歌までである(切の大きさ、 $27.1 \times 14.6$  cm。歌番号は「新編国歌大観」による。以下同じ)。

伝弘融筆後撰和歌集切  
(常楽寺蔵三幅対の内)

Web公開に際し、  
画像は省略しました

Web公開に際し、  
翻刻は省略しました

伝頓阿筆新古今和歌集切  
(常楽寺蔵三幅対の内)  
番作者から四三一一番歌までである(切の大きさ、  
 $22.0 \times 14.9$  cm)。

伝頓阿筆新古今和歌集切  
(常楽寺蔵三幅対の内)

Web公開に際し、  
画像は省略しました

Web公開に際し、  
翻刻は省略しました

伝兼好筆伊勢物語切（常楽寺蔵三幅対の内）  
きさ、24.2×15.7cm。私に句読点を付した。

伝兼好筆伊勢物語切（常楽寺蔵三幅対の内）

Web公開に際し、  
画像は省略しました

Web公開に際し、  
翻刻は省略しました

篠田厚敬と常楽寺什物との関係について、富倉氏は、天野信景「鹽尻」にある、「黒川申純」が、元禄十二（一六九九）年に、兼好三百五十回忌にちなみ伊賀の国見山の兼好旧跡を訪れ、のちに兼好の真影を種生の神主に贈ったとする記事を取り上げ、実際は厚敬の所行であったことを明らかにした。近年、川平敏文氏が、「兼好上人像」と篠田厚敬（『日本古典文学会々報』133号 平成十三年七月）において、常楽寺蔵兼好像の来歴をめぐり、さらに詳しく検証した（川平氏の報告により、名古屋大学岡谷文庫蔵「徒然草拾遺抄」の厚敬の書写奥書が、富倉氏が指摘した『鹽尻』記事の原本であることが判明した）。川平氏は、元禄十二年二月に、祇園の社を訪れた厚敬が、兼好に纏わる古器什物等が伝わらないことを聞き、帰京後、「一誓願を發し」、土佐光成に兼好影像の作製を依頼し、神主に贈ったとする経緯を明示した。その画幅は、毎年二月十五日の兼好忌に掲げられ、元禄十四（一七〇二）年二月には、「兼好略伝一巻」を、新たに奉納したという。祇園社は、兼好塚が発見された草高寺旧跡の近隣に位置し、また、草高寺は、天正の争乱で荒廃、宝永（一七〇四～一七一二）頃に再興された寺院であり、再び幕末に廢寺となり、「それらの文物は現在、近隣の真言宗常楽寺に移管されている」とする。

一方、三幅対については、小松操氏に指摘がある（「弘融僧都」から徒然草へ）『解釈』八巻一号 昭和三十七年一月）。

小松氏は、富倉氏の紹介を踏まえ、金沢文庫蔵「兼好由来」（安永七年秋野町篠田次郎左衛門）とし、軸物は「元禄十七年一月三日」寄進という」と、解説する。これによると、三幅対は、

元禄十七（一七〇四）年二月に奉納されたことになるが、それは、以下に紹介する極札から裏付けることが出来る。

常樂寺経蔵の函中には、三幅対や兼好上人像など兼好に纏わる文物とともに、三枚の極札を収めた小さな函が保管されている。それら極札の表には、前掲古筆切の伝承筆者名と冒頭文がそれぞれ記されており、当該古筆切に付された極札であつたことがわかる。

### 兼好の極札

表「兼好法師 称和歌四天王／ふたりして（琴山印）」

裏「切癸未二（六代古筆了音印）」（元禄十六年二月）

### 頓阿の極札

表「頓阿法師 称和歌四天王／秋のたの（琴山印）」

裏「切丙子七（五代古筆了音印）」（元禄九年七月）

### 弘融の極札

表「華嚴院弘融僧都 うちはへて（琴山印）」

裏「切癸未七（六代古筆了音印）」（元禄十六年七月）

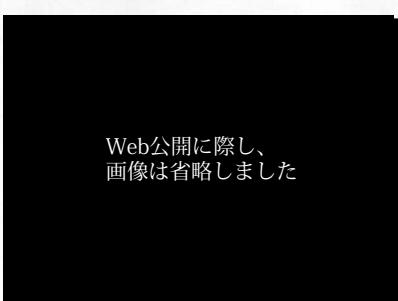
### 極札の表と函

### 極札の裏（部分）

Web公開に際し、  
画像は省略しました



Web公開に際し、  
画像は省略しました



極札の裏書によつて鑑定の時期が判明する（五代古筆了音は、元禄十四年二月十九日五十七歳没、六代古筆了音は、享保十年六月二十二日五十二歳没であることから判断した）。伝弘融筆切が最も遅く、元禄十六（一七〇三）年七月である。よつて、それより後に、厚敬は、古筆切入手し、三幅対に装幀し、函を眺え、極札共々奉納したものと見られ、前掲「兼好由来」に記された「元禄十七年一月三日」に、時期的な矛盾はない。また、川平氏が指摘する、「兼好上人像」が、兼好の命日の二月十五日に掲げられたこと、「兼好略伝一卷」も、二月の奉納であったことを考へると、この三幅対も同様に、兼好の忌日に合わせて納められたのではないかと推測される。

弘融

頓阿

兼好



伝弘融筆古筆切一覽

\*極札は「慶融」とするが、弘融の切のツレとの判断に従う（備考欄解題論文参照）。

他に、「弘文荘待賈古書目」(17巻 昭和二十四年四月。20巻昭和二十六年六月再録)に、拾遺集の残巻が伝えられている。

### 三五 拾遺集 残巻 伝弘融法師筆 鎌倉末期写 一巻

一五〇〇圓 前田家旧藏本。縦廿六粋半、全長一米半。

淡黄色の鳥の子、和歌一首一行書き。巻第一、二、三、

五、六の五巻中の残缺。書佳し。

伝弘融筆古筆切には、複数の筆跡が存する。また、伝承筆者を弘融としながらも、書写年代が、鎌倉中期や室町に判断される古筆切もある(解題等参照)。弘融の自筆については、管見では、「東寺百合文書」ホ函八四に、「一室／八月六日弘融(花押)／寶嚴院／御同宿中」と、署名と花押の記された書状を見出しが、年次未詳であるため、同人物であるか確定したい(紙の端には別筆で、「西八条一室折紙」と記す)。

なお、伝弘融筆の後撰集切と拾遺集切には、「近江切」と呼ばれる古筆切があり、伝承筆者を三井寺の「公猷」、仁和寺の「慶融」に鑑定するものとの間で混乱が見られる(古筆学大成・小松茂美氏解題、「続国文学古筆切入門」藤井隆氏解題参照)。同じく後撰集切には、「一条為世を伝承筆者とする「柴田切」」のツレも存する(「続々国文学古筆切入門」田中登氏解題参照)。

常楽寺蔵三幅対の古筆切には、それぞれツレを見出す。伝弘融筆後撰集切は、「柴田切」のツレであり、「玉海」「続々国文学古筆切入門」に、弘融筆と鑑定する切が所載される。伝頃阿筆新古今集切は、「新撰古筆名葉集」に「中国切 四

半新古今歌二行書」とあり、「薫叢」「蓬左」「古筆學大成」10個人藏古筆手鑑(図34)などにツレを見出す。「古筆學大成」解題には、「五代古筆了珉の極札は、「和歌四天王内頓阿」の筆という」とあり、当該切と同じ鑑定であると見られる。

伝兼好筆伊勢物語切は、「古筆名葉集」「越前切」「雲紙」四半、伊勢物語に相当し、当該断簡は、「布留鏡」(三一十二)に連接、さらに「村瀬庸庵愛蔵品入札並売立目録」(昭和十八年二月八日・名古屋美術俱楽部)掲載「八四、兼好越前切」の前に位置する。つまり、連続する第九段断簡の中間に当たる。

「古筆學大成」解題は、「布留鏡」断簡(大成図20)の極札を「六代古筆了音」とし、常楽寺の切と同じ鑑定と見られる。

弘融の古筆切については、「古筆名葉集」「新撰古筆名葉集」に記載はなく、「昭和古筆名葉集」(昭和二十二年)は、「公猷」の次に弘融の項目を設ける(「続国文学古筆切入門」参照)。また、早くに、小松操氏が、「慶安大手鑑」や「華押譜」の弘融の切れを取り上げ、紹介している(前掲論文)。

### 三、極札をめぐつて

弘融は、「徒然草」八十二段と、八十四段に登場する僧侶であるが、所属の寺院などについては、示されておらず、弘融に初めて注釈を施した「野槌」再刻本にも、所属は明記されていない。

○弘融僧都（權少僧都弘融。文保二年十一月於<sup>ニ</sup>押小路ノ亭<sup>ヲ</sup>、<sup>テ</sup>「<sup>フシコウジ</sup>」）

隨<sup>ヒ</sup>少將為仲人道<sup>ニ</sup>受<sup>ク</sup>古今和哥集訓說<sup>テ</sup>云々。建武<sup>ノ</sup>比<sup>ト</sup>

兼好房<sup>ト</sup>有<sup>ニ</sup>因縁<sup>故</sup>弘融古今集<sup>ヲ</sup>仁和寺<sup>ノ</sup>居所<sup>ニ</sup>預<sup>シ</sup>置<sup>カ</sup>

之<sup>ヲ</sup>。貞和三年伊賀國佛性寺<sup>ノ</sup>遍照院<sup>ニ</sup>居住<sup>ス</sup>。時<sup>ニ</sup>歲六十

一〇。〔大阪府立図書館本〕

この「野槌」の説は、以後の注釈書に長く継承されることに

なる（再刻本の刊行年は不明であり、川瀬一馬氏の慶安頃とする見

解を目安とする（新註國文學叢書「徒然草」）。また、伊賀の地誌には、「野槌」記事と同内容を引用しながらも、仁和寺の僧侶であるこ

とを記すものもある。後述）。

弘融は、鎌倉末から南北朝期にかけて、仁和寺で学僧として活躍した人物であるが、「徒然草」以外の、所謂文学作品には名前は見えず、また、古今集を受講したと伝えられているが、詠歌もほとんど残っていない。

しかし、弘融の古筆切は、早くから売買の対象になつていた。例えば慶安四（一六五二）年の「慶安手鑑」卷末「古来流行手鑑目録并代付」には、「古筆庵奥書に曰、右者寛永の比の代付也、或は紙の内の善惡、或は不出来物時代により、少宛高下可有者也云々」とし、「仁和寺殿 守覺 金參両」に並び、「同弘融 金式歩」を掲載する。したがつて、寛永頃既に、「慶安手鑑」を編纂した古筆了佐は、正しく弘融を仁和寺の僧侶として認識していたことがわかる。

手鑑における弘融の切の配列を見ると、例えば、「手鑑（白

鶴美術館蔵）」（古筆手鑑大成）では、次のように位置する。

258 仁和寺宮守覺親王

259 仁和寺弘融

260 仁和寺宮覺道親王

261 仁和寺宮覺譽親王

262 仁和寺宮覺譽親王

263 仁和寺宮道永親王

258 守覺は、五代御室（建仁二（一一〇二）年没）、260 覚道は、二十二代御室（大永七（一五二七）年没）である。261 262 覚譽は、

花園皇子、園城寺聖護院門跡（永德二（一三八二）年没。仁和寺との関係未確認）、263 道永は、貞常親王皇子、後土御門猪子、仁和寺上乘院（天文五（一五三六）年没）である。

次いで、「翰墨帖（岩国・吉川家藏）」（古筆手鑑大成）では、

「92春日社家祐春 93春日社家祐臣 94仁和寺殿院家弘融

95石山座主果守 96真光院尊海僧正 97淨弁法印 98安倍叔恵」のよう、真言宗の僧侶の初めに位置する。なお、96「真光院尊海僧正」は、第二十一代御室である。

「あけぼの（梅沢記念館蔵）」（古筆手鑑大成）では、「92道元

93俊寛僧都 94弘融僧都 95頼朝卿 96「位尼」の順である。

これら手鑑の配列からは、仁和寺の僧侶としての認識と、著名な人物としての扱いが看取される。その背景には「徒然草」を置いて見るべきであろうが、一方で、「徒然草」の注釈書の世界とは別の情報源を想定する必要もある。

極札には、「華嚴院」を冠するものがある。華嚴院は、仁和寺の院家の一つであり、弘融を、華嚴院の僧侶として位置付けることは、弘融の師である、「徒然草」二百八段に登場する「華嚴院の弘舞僧正」との関わりから、とりわけ注目される。

弘融は、出自が不明であり、また「仁和寺諸院家記」にも名前が見出されないため、伝歴が詳らかでない。弘融の著作「詵遮要秘鈔」の伝本の内、高野山大学附属図書館蔵金剛三昧院寄託四冊本（江戸期写）の巻第八に、弘融の名前の傍らに「華嚴院」の朱書きを認めるが、東寺觀智院金剛藏本を底本とする「大日本佛教全書」では、同箇所は「弘融（朱）仁和寺心蓮院」とあり（「密教大辞典」も、「仁和寺心蓮院に住し」、法律に任せらる」とする）、伝本間に異同があつて確定できない。

弘融と華嚴院の関係は、以下に示す弘舜と弘雅との関わりから示唆される。弘融が「華嚴院の弘舞僧正」の付法であることは、「真言付法血脉仁和寺」（武内孝善氏「東寺觀智院金剛藏本〔真言付法血脉 仁和寺〕」[高野山大学密教文化研究所紀要] 第六号 平成五年）や、「野沢血脉集」巻第三（「真言宗全書」<sup>39</sup>）をはじめとする血脉類によつて確認でき、さらに、弘融の著作「詵遮要秘鈔」の奥書の分析からは、弘舜と弘融との師弟関係を窺うことができる。また、弘融の著作を書写し、後代に伝えた弘雅も、華嚴院の僧侶である。弘雅は、「詵遮要秘鈔」を、康安元（一二三六）年に（書写奥書は、管見の伝本全て

るため、誤写と判断した）、前掲「康秘」を、応安三（一二七〇）年に、伊賀に赴き書写している。弘雅は、「最勝光院方評定引付」（「東寺百合文書」ル「大日本史料」）において、「応安六年十二月廿九日 花嚴院（<sup>弘雅</sup>）（略）明年々予事、依為順臘、花嚴院法印可被勲仕之」のように、「華嚴院法印」と呼ばれる僧侶である（「仁和寺諸院家記」「華嚴院」では、「弘雅 嶽融法印附法」とする）。

このような弘融の身近な人物の所属から、弘融も、華嚴院の僧侶ではないかと類推する。そのように見なすと、「華嚴院弘融僧都」（常楽寺藏三幅対の内・中島家手鑑など）とする極札が、前掲「康秘目録」の「權少僧都法眼和尚位弘融」によつて確認し得る「僧都」という僧階と合わせ、最も正確な情報を伝えるものと判断される。初代古筆了佐の極は、「仁和寺殿弘融」と記しており、以後、新たな情報が加えられたものと見受けられる。その情報源は不明であるが、弘融が華嚴院の僧侶であったことの確定は、「徒然草」の読解だけではなく、仁和寺の法流の問題に波及すると思われる。中世に遡ることの出来る史料は非常に少なく、極札に記された「仁和寺華嚴院弘融」は、極めて重要な情報と言えよう。

さて、「花押譜」（文化十二（一八一五）年刊行）には、「遍照院弘融」として、小伝が付されている。

遍照院弘融 権少僧都 好<sup>二</sup>和歌<sup>一</sup>、與<sup>一</sup>兼好法師<sup>二</sup>相親。  
貞和頃住于伊賀州佛性寺<sup>一</sup>。

康永二年三月廿二日（花押） 古筆氏摹（大阪府立図書館本）

これは、「野槌」記事（あるいは伊賀の地誌）に基づくもののようにではあるが、そこには花押は示されていない。依拠資料を「古筆氏墓」と記していることから、古筆家に、弘融の伊賀における資料が伝わっていたものと推察される（康永二年三月二十一日は、「康秘」執筆時であり、伊賀に住していたと見られるが、「康秘目録」にはこの日付は確認されない）。

また、林家旧蔵「古筆手鑑」（第一帖・東京大学史料編纂所蔵写真・現所蔵者未詳・平成八年四月撮影）には、「弘融へ仁和寺／遍照院」とあり、仁和寺の僧であること、伊賀の佛性寺（遍照院）の僧であることの、両方が融合した例と見られる。なお、「康秘」（尊法 第廿二註）の弘雅の書写奥書に、「故遍照院僧都弘融自筆本」とあり、弘融を「遍照院僧都」と呼ぶ例を見出す。

さらに、「薦叢」（今治市河野美術館蔵・国文学資料館マイクロフィルム）の極札には、「仁和寺殿院家弘融僧都 徒然草見／いかにせむ」とあり（寛政年間の成立。弘融の極札には、古筆家門人、神田家の印。この印を用いたのは、「道儀」（正徳元（一七一一年・七十九歳没）以降か）、これは、弘融と「徒然草」が結びついた例である。

古筆切には、「華嚴院弘融僧都」とする極札が付されていた。厚敬は、「京二条烏丸下ル秋野町」（金沢文庫蔵「兼好由来」）の人である。その著作「兼好法師行状」は、偽文「園太曆」を踏まえた兼好の伝記であり、兼好の伊賀での活躍が物語風に描かれており、そこには頓阿も登場する。しかし、弘融の名前は見られない。本書は、元禄七（一六九四）年の成立であり、厚敬が、伊賀を訪れるのは、それから五年後のことである。伊賀には、兼好、頓阿、弘融の三人が、居住したとする伝承がある。例えば、「伊賀国名所記」は、次のように記す（内閣文庫蔵・寛政四（一七九二）年写本。訓説は私意による）。

#### ・佛性寺

六條右大臣顯房公の願寺也。宗祇法師云、權少僧都弘融者、文保二年十月押小路の亭において、左少將為仲入道を執して、古今集の訓説秘藏を伝受いたされ、かたのごとく数寄にて侍し。老て、いがの国仏生寺の遍照院にすまれし由、き、侍ると云々。

#### ・国見山

名ばりのおく也。此處のちかきあたりに、田井の庄といふ處に、兼好法師の石塔有よし、至宝抄に侍るゆへ尋ねまかりしに、田井といふ村のちいさき一村の杉の内に、兼好庵の跡とて、其跡侍る。石塔なども爰に有けるにや。兼好は法心の後、此國に住給ひけるにや。頓阿なども、此國を行脚せられけるは、其比ほひの事にや。

#### 四、弘融と伊賀

篠田厚敬が、元禄十七年に奉納した三幅対の内、伝弘融筆

・  
国分寺 安国寺

宗祇の抄に云、伊賀の国の国分寺へまかりしに、頓阿法師の手跡、此寺に侍しゆへに、いぶかしくおぼえて、人につづね侍はれは、この所に五、六年もすみけるよしいひしひぞ、さるゆへにやと覺ゆ。

また、「伊水温故」「佛性寺」（延宝七（一六七九）年稿・菊岡如幻著・伊賀史談会発行）には、「弘融ハ洛西大内山仁和寺ノ院家也」との注記があり、弘融が仁和寺の僧侶と認識されたことがわかる。さらに、「和歌名所追考」第五十四「伊賀國」（元禄十二（一六九九）年・神宮文庫本）では、「草蒿寺」の項に、「本尊 国見山 信西法師開 兼好此寺住終ル」とし、「仁和寺院家弘融僧都ともしたしく、僧都も此国にて住果られし事、佛性寺条にみえし」と記しており、ここに、兼好と弘融、そして草蒿寺とが結びつく伝承を見出す。

元禄十二年に伊賀を訪れた厚敬は、おそらく、これらの伝承を耳にしたものと思われる。兼好・頓阿・弘融の三人と伊賀とが結びつき、やがて、三幅対の奉納へと繋がつていったものと考えられる。

近世における兼好の伝記が、伊賀の地と、強く結びついていることは、從来指摘されてきた。兼好と伊賀との関わりが詳らかにならない今、弘融の伊賀居住の事実は、伊賀における兼好の伝説、あるいは、それを基底として作製された兼好伝を考える上で、示唆を与えてくれるものと思われる。

さらに、弘融の事跡を解明することは、仁和寺の法脈について考えるための布石となり、また、兼好と弘融の交流から、兼好の伝記研究への手がかりになると思うのである。

〔付記〕常楽寺所蔵三幅対の写真掲載、ならびに翻刻をご許可いただいた常楽寺権口有弘氏に深謝申し上げる。

（よねだ・まりこ） 本学大学院博士後期課程